

# CCに並ばない

今日がその日であるということを理解するのに、十秒ほど要した。

わたしを眠りの底から掬い上げた電子音を止めるために枕元に手を伸ばし、ついでに時刻を確認する。午前、七時。上半身を起こして、乾燥対策のマスクを外した。

真っ先に喉の調子を確認する。軽くハミングすると、ほんの少しだけちくりとした痛みが走った。この程度なら毎度のことだから、大丈夫。しっかり発声すれば感じなくなるだろう。

ただ、昔よりも稽古で蓄積された疲労が抜けにくくなっている。若いころは一晚ゆっくり眠れば元気になるのに。

あちこちにガタがきている体に鞭を打って、くたびれたジャージに腕を通す。

外に出て、冷たく澄んだ空気に包まれると、自然に背筋が伸びた。この感覚は、人の前に立ったときと似ている。ステージに上がって、客席からの視線を浴びているときの感覚。

まだ太陽は姿を現してはいないが、東の空がじんわりと温かみを帯びた色に染まりつつある。頭上の電線で、くるくると鳩が鳴いた。

わたしは軽く足のストレッチをしてから、緩やかに走り出した。この道は、今わたしが向かう方向からの一方通行だから後ろからの車を気にする必要もないので、真ん中を気持ちよく進むことができる。

道は少しずつ上り坂になっていく。氷のような外気の中で、「はっ、はっ」と吐き出す自分の息だけが熱く白い。勾配がきつくなってくると呼吸が乱れやすくなる。吸っ

て、吸って、吐いて、吐いて。意識しないとこのリズムが崩れてしまう。

坂の頂上が折り返し地点だ。ここまで来ると、朝霧に包まれた、まだ半分眠りの中にある街を遠くまで見渡すことができる。住宅街からは人が出てくる気配もない。でもたぶん、あの中では母親たちが朝食の支度なんかをしているのだろう。

わたしはずらっと並べられた選挙ポスターの前で、片足の拇指球を中心にしてくりりとターンした。

同じ道を帰ってくるころには、太陽がその姿を完全見せていて、鳩はどこかへ消えていた。五十メートルほど歩いて息を落ち着かせ、また簡単にストレッチを済ませると、アパートの自分の部屋に戻った。

わたしは「チーム・スリジエ」という小さな劇団に所属している。

普段は会社勤めをしているが、週末や祝日は劇団で過ごす。短大生のころに嵌った演劇が、どうしてもやめられなかったのだ。

故郷に帰ってきてほしいという両親の願いを振り切り、都会に出てきたのには、そういう理由がある。田舎には劇場はおろか、劇団なんかないのだ。

わたしは別に俳優として食っていきたいわけではない。

そういう稀有な存在になりたいと願うには、わたしは大きくなりすぎた。今年でとうとう三十の大病に乗ってしまった。いくら何でも、ここから人生の大勝負に出る気にはならない。だからわたしにとっての演劇は、本気度の高い趣味に過ぎないのだと理解している。

そうして演劇を続けていく中で、ある日運命の脚本に出会った。

試し読みをしたとき、雷に打たれたような気がしたものだ。わたしを虜にしたその台本は、所属する劇団が行う、クリスマス特別公演で上演することが決定した。それが二ヶ月前。そして、今日が本番。

わたしにはどうしても、どうしてもやりたい役があった。

その脚本「女たちの聖夜」に登場する、『マリアンヌ』という女性の役だ。

ランニングをこんなに長く続けられたのは、ひとえに『この役』のためだったといっている。マリアンヌは長ゼリが多く、肺活量を必要とした。

なんども「もういいかな」と思ってしまう朝があった。低血圧というのもあって、朝は弱い。だけど、朝に走るということを決めたとき、これは願掛けかもしれない、

なんていう考えも浮かんだ。もしわたしが二ヶ月間、走りきることができたら、公演はうまくいく、という。

ランニングのおかげで、すつきりと一日をスタートできるようになった。また、ダイエットにも効果があった。わたしは二ヶ月で、五キロやせたのだ。公演は今日で終わりだけど、ランニングは続けるべきかもしれない。

溶き卵に牛乳と砂糖を入れ、食パンを浸す。その間にキャベツを千切りにして、サラダ油、お酢、塩、胡椒をかけてサラダを作っておく。フライパンにバターを落とし、音を立てて溶け始めたころを見計らい食パンをそつと乗せる。焼けるまでの間に、卵を溶いたボウルと包丁、まな板をざつと洗っておく。

最後にインスタントコーヒーを添えたら、朝食の出来上がり。フレンチトーストにはメイプルシロップや蜂蜜はかけない。カロリーを抑えるためだ。栄養学的には野菜スープでもあったらいいのだろうけど、時間がなかった。

リモコンでテレビの電源を入れると、静かだった部屋の中に芸人らしき男の笑い声が響いた。名前も知らないけれど、ちよつと下品だなと思う。

朝の情報番組にチャンネルを合わせ時計代わりにして、手を合わせる。いただきます。

予定より十分遅刻して劇場に入ると、受付の支度をしていた竹ちゃんに目を丸くされた。

「めずらしい、アヤコが遅刻なんて」

わたしは走ってきたせいで弾んだ呼吸を整えつつ言った。

「たまたまりバウンド防止特集をやつてて……」

「は……？」

何でもない、と手を振り、楽屋へと向かった。

控え室は男女で分かれている。女性、と張り紙がされた方に入ると、中にはもうほとんど役者がそろつていた。みんな衣装は着ているが、化粧はしていない。これからリハーサルが始まるからだ。本番までにはまだ時間があるから、落ちたり崩れたりするのを気にしているのだろう。

自分の荷物をロッカーにしまい、コートをハンガーにかけている最中、なんだか廊下が騒がしかったのが少しだけ気になった。

何事だろうと思っていると、後ろから肩をたたかれ、女性にしては低い声で話しかけられた。

「よ、アヤちゃん。おはよ」

「おはようございます、マーコさん」

深みのあるアルトで話すマーコさんは今回の劇の演出

だ。わたしよりもほんの少し年上で、わたしよりもほんの少し背が低い。その代わり、始めて会った相手に威圧感を与えてしまうくらい美人だ。センスがよく、団員はみんな彼女にカリスマ性があることを認めている。

「ちよつと話さない？」

言いつつ、もう楽屋の片隅に椅子を二つ引きずっていき、断る理由もない。

「いいですよ」

周りの役者たちは自分の台詞を確認するので精一杯だ。発声の声に混じってしまえば、わたしたちの会話など聞こえないに違いない。

マーコさんは長い足を組むと、前のめりになってわたしに問いかけた。言葉が周りの声にかき消されないためだろう。

「いよいよね。気分はどう？」

「悪くないです」

「……いまさらこんなことを言われても、という感じはするでしょうけどね。あたしはやっぱり、あんたには乳母のメアリか、町娘のリリアンをやってほしかったのよ。本当にいまさらだけど」

わたしは内心のショックをできる限り抑えて、微笑んだ。やっぱりこの人も、そう思っていたのか。

「それは……他の人にも同じことを言われましたけど」

「そうでしょうよ。何もそんなに、マリアンヌに入れこまなくたっていいじゃない……って。ずっと思っていたわ。あなたが決めたことだから、どうしようもなかったけど」

マーコさんはほほに手を当てて、ふ、と息をついた。ため息をかみ殺したら、こんな風になるのかもしれない。

分かつている。彼女は悪気があって言っているのではないことくらい。ただ、本番前について、口を滑らせたに過ぎないのだ。マーコさんの仕事は、よりよい公演を作ることなのだから。

「そう言っていただけるのはありがたいのですが」

そう断ってから、わたしは言った。

「わたしはマリアンヌがやりたかったです、どうしても」

うまく笑えていたかどうかは、よくわからない。

マーコさんの話は五分ほどで終わった。というのも、女性用楽屋の扉がいきなり大きく開かれ、焦った顔のキューさん——舞台監督だ——が、飛び込んできたからだ。

「マーコ、いる？」

マーコさんはキューさんの表情から何かを察したらしく、すぐに立ち上がって楽屋から出ていった。わたしは

彼女を黙って見送り、二脚の椅子を片付けた。

リハーサルが始まる、四十五分前。控室で発声を行っていたわたしのところに、マーコさんが神妙な顔つきでやって来た。

「アヤちゃん。……準備をしてくれる？」

とん、と胸を突かれたような衝撃が走った。

\*

『マリアンヌ』は、「私たちの聖夜」に登場する、喜怒哀楽のはっきりとした女性のキャラクターだ。怒るときは顔を真っ赤にして髪が逆立つほど怒るし、泣くときは口を大きく開けてはしたなくらいに泣く。彼女の笑顔は劇中で「太陽」と称されるほどに周りを明るく照らすのだ。

マリアンヌの衣装は真っ赤なドレスだ。わたしは生まれてこのかた、赤い服など買ったことがないが、実は一番好きな色が、赤だった。だからマリアンヌがいい、というわけではない。わたしはただ、彼女の激しい生き方に憧れを抱かずにはいらなかったのだ。

——マリアンヌになれないのなら、役はいらない。

これが、わたしの出した答えだった。

周りからは止められた。劇団の中ではわたしは中堅の役者になっていたし、マーコさんが言う通り、意地さえ張らなければ出来る役はいくつもあつたはず。

だけど、今回に限っては、そうはいかなかった。わたしは他の役を演じることに、これっぽっちも魅力を感じなかったのだ。

マリアンヌのオーディションに落ちたわたしは、代役として淡々と練習をこなした。

\*

チーム・スリジエの方針としては、代役を立てるというのは珍しいことではなかった。何が起るかわからないし、備えあれば憂いなしだからだ。その代り、オーディションに落ちた人に無理に代役を押し付けるのではなく、本人が希望した場合のみということになっている。

リハーサルでいくつかの指示を受け、立ちの修正を行った。マリアンヌの相手役である男性役者は舞台に出てきたわたしの姿を見ると、不思議そうにマーコさんに聞いた。

「もしかして遅刻？」

彼女は腕を組んで重々しく頷いた。

「ええ。しかも、連絡が取れないの。……大丈夫よ、アヤちゃんだってずっと練習してきたし、台詞だってばっちりだから」

——でも、本物のマリアンヌじゃない。

マーコさんがそう付け加えたいのをぐっとこらえたように見えてしまったのは、わたしのネガティブな部分が存在感を増してきているからだろうか。そう願いたい。

「困ったなあ。今日が最初で最後の公演なのに」

「まったくだわ。あの子は遅刻常習犯だけど、連絡くらい取れるようにしておいてほしいわよね」

わたしは二人の会話を聞きながら、ぼんやりとサスペンションライトの光の中に突っ立っていた。夢を見ている気分だ。もしかしたら次の瞬間にも、枕元のアラームが鳴って飛び起きるのかもしれない。

わたしの心配をよそに、いつまでたっても夢は覚めなのまま。開場二十分前になっても、彼女は現れなかった。

マリアンヌは劇の冒頭で一人語りをするようになってくる。登場するのは、上手側の舞台そでから。

薄暗い、五人くらい人が入れればぎゅうぎゅうになってしまいう空間で、わたしはいろんなことを考えた。

マリアンヌができることになって、嬉しい。これは本

心。なのに、心から喜んでいるかと言われると、絶対に違う。こんなことを望んじやない。わたしは実力で、自分の力で、マリアンヌを勝ち取りたかったのに。

わたしはマリアンヌになれなかった。その理由をマーコさんに聞いたところ、こんなふうに戻された。物分りの悪い生徒に言い聞かせるような口調だった。

「アヤちゃんは読みに必死になっちゃうあまり、その他のことに気を配れなくなっちゃうのが欠点なの。努力家だから、きつとその点もすぐに直っていくだろうけどね」

感情の起伏が激しいマリアンヌを演じるのに、わたしは無表情すぎた。自分の感情通りに表情を変化できないというのは役者として大きすぎる欠陥だ。自分では笑っているつもりでも、心からの感情でないと表情が動かない。気持ちはどこかで寄り道してしまうのだ。

「目標に向かってひた走るのはとても良いことよ。誰にでもできることじゃない。だけどね、そのせいで周りのことが見えなくなったり、楽しむことを忘れてしまったりは元も子もないとは思わない？」

こんなことを言われたら、猪突猛進しているかのようではないか。そんな自覚はない。

わたしはただ、努力もしないくせに自分の望む未来が降ってくるとは思えないだけだ。

棚から牡丹餅が落ちてくるのにはちゃんと理由があ

り、食べ物が欲しいなら働かないといけなさと考えているだけだ。

だからこそ、この状況を、どう捉えていいのか、分からない。

開演まであと十五分。

わたしはこのまま舞台上上がるのだろうか。

マリアンヌを演じていいのだろうか。

今、彼女を演<sup>や</sup>つて後悔しないだろうか。

——わたしに、赤いドレスは似合っているのだろうか。

上手側舞台そでの扉が、大きな音を立てて開かれた。

「アヤ！」

満面の笑みを浮かべたマーコさんの後ろに立っていたのは、息を弾ませる華奢な女性。

その女性と一瞬、目が合った。瞳が大きく見開かれる。

次の瞬間、わたしは舞台に背を向けて駆けだした。女性用の、楽屋に向かつて。

この衣装を、彼女に手渡すために。

ヒロインを演じる江崎真理亜<sup>えざきまりあ</sup>が到着したのは、幕が上

がる十二分前だった。

クライマックスで、マリアンヌは冒頭と同じように一人語りをする。朗々と響く声は、悲しみに満ちていて、それでいて力強い。

最後の一言を言い終えたあと、彼女は懐から短剣を取り出し、自らの胸に突き立てようとする。

その柔らかい肌に鋭い切っ先が振り下ろされる動きのきっかけで——暗転。

暗くなつた舞台に、役者たちがぞろぞろと並ぶ。足元に貼られた蓄光テープの小さな灯りは、暗闇の中では大きな目印になる。

わたしはそれを、下手の舞台そでから眺めていた。

舞台上に再びライトが照らされると、そこには役者がずらりと並び頭を下げている。観客は彼らに惜しめない拍手を送つた。

色とりどりの衣装を身に纏つた役者たちが斜め前に右手を差し出すと、客もそちらを向く。すると、客席後方で音響操作をしていた裏方の人間と、同じく照明操作をしていた人間が立ち上がり、礼をする。

次に、左手を斜め前に差し出す。客はそちらを見る。

演出、舞台監督、演出補佐、衣装メイク、広報などの

係が立ち上がり、頭を下げた。

最後にもう一度全員で深く礼をすると、盛大な拍手を BGM にゆつくりと幕が下りていった。緞帳を下ろすス イッチは、下手の奥、客席からは見えない位置にある。劇団の人間がそろって頭を下げてからきつかり三拍後に、このスイッチを長押しする。

わたしがこの公演で唯一やった仕事は、これ。

カーテンコールには並ばなかった。

後片付けは設営よりも時間がかからない。夢の舞台は さつさと崩されていく。

胸の辺りにぽっかりと空間が開いてしまったかのような喪失感を抱えて、大して多くもない自分の荷物をのろのろとまとめる。コートを羽織った時、控室に真理亜が入って来て、わたしを呼び止めた。なんとなく気まずい空気が流れる。こんな時に限って、周りには誰もいない。

真理亜はアイラインが落ちきっていない目元を「ごしごしとこすった。

「びっくりした」

おつかれ、という挨拶もなく唐突にそう言われて、思わず面食らってしまった。

何がだろう。黙って続きを促すと、真理亜は近くの椅

子に腰掛けつつ言った。

「あんな顔、初めて見たから」

「あんな顔？」

「あのときのことよ」

たぶん、彼女がぎりぎりまで滑り込んできた時のことを言っているんだろう。あの時、舞台そでで、わたしと真理亜はたった一秒にも満たない時間見つめ合った。

にせものマリアンヌと、ほんものマリアンヌの間に流れた、不思議な時間。

自分が着るはずの衣装を身に纏ったわたしを見て、彼女はあの瞬間、何を思ったのだろう。おこがましいと、怒ったのだろうか。

だけど、遅れてきたのは彼女で、もし来なかったら舞台上上がるのはわたしだと決まっていた。そのこととやかく言われる筋合いはない。

——まだ何も言われていないのに、わたしはどうしてこんなに喧嘩腰なのだろうか？

マーコさんに言われたことを思い出す。

確かに、わたしはこんなとき、どんな顔をしていいのか分からない。自分の感情と表情が直結していないような、どこかで寄り道した感情が別の形で排出されてしまっているような、そんな気がする。

知りたい。あの瞬間、わたしはどんな顔で立っていた

のか。

「アヤはあんまりオモテに出さないじゃない。だから、驚いたのよ」

「……わたし、どんな顔してたの」

真理亜はからりと、まるで太陽のように笑った。

「心から安心したって顔だったよ」

【付記】

本作は、第四十九回中国短編文学賞優秀賞受賞作で、中国新聞2017年5月12日付朝刊に掲載されました。転載を許諾いただきました関係機関に厚く御礼を申し上げます。

—こいけ・なつみ 2017年度卒業生—

『尾道市立大学日本文学論叢』第13号目次（平成29年12月）

講演

地霊の囁きに耳かたむけて

東 雅夫

江戸川乱歩「陰獣」論

中島 智大

―ふるさと怪談の時代―

創作

黒甜戯語

尾形 祥子

林房雄「青年」論

芝崎 祐介

―〈プロレタリア・ルネッサンス〉の精神をめぐって―

プリズムリズム

松浦 瑞穂

平成二十八年度卒業論文・修士論文題目

平成二十八年度三年生研究発表会発表題目

彙報

研究論文

「うそをつく」の語彙史

鈴木 真穂

『左大臣義教公富士御覧記』における構成意識と

和歌表現

小松 春菜

『狂歌百人一首』を読む

小松 春菜

財津 奈々

田口智恵美

藤川 功和